

源氏物語の背景と平安貴族の生活

源氏物語を紫式部が書いたとされる石山寺は瀬田川清流の畔に位置し、伽藍山を背にしています。天然記念物に指定された珪灰岩の上には天平時代、建立（こんりゅう）された諸堂が立ち、中でも月見亭は近江八景の「石山の秋月」として有名です。また、石山詣と呼ばれた観音信仰は、源氏物語・更級日記・寝覚・栄華物語・落窪物語・蜻蛉日記・和泉式部日記・浜松中納言物語などの古典文学に記されています。



この石山寺に「源氏の間」があります。薄暗い部屋に置いています。が、何となく不気味で洞窟の中をのぞいたような気分になります。

紫式部が『源氏物語』の構想を練るため、石山寺に参籠、たまたま満願の日が寛弘元年（1004）中秋の名月でした。折から昇る月を眺めつつ筆を

初めたと伝えられているのです。

石山寺は滋賀県です。琵琶湖の北東部に位置していますが、京都からはだいぶ距離がありますが、案外近くの場所と意識されていたのかもしれませんが。瀬田川の瀬田の唐橋、三井の晩鐘、石山の秋月など旧跡は暇ありません。

石山寺である薄暗い源氏の間を見た時、一体、あの暗さで筆が運べたのか、源氏五十六帖と言われているあの和紙はどうしたのだろうか。と勝手に想像します。何しろ紙は貴重な時代です。

選訳授業のはじめに紹介した更級日記の得て帰る心地のうれしさぞ。いみじきや……。の一節は、紙に書かれた物語が極めて高価で貴重なものであったという背景を知って鑑賞するといっそうこの思いは伝わってきます。宮中の女房ならではの作です。

話はやや尾籠になりますが、この当時のトイレはどうしていただろうと思います。廁（かわや）ということばがあります。川の屋で、要するに流れている川の上に板を敷いてと最もらしく解説するひとがいますが、あながち間違つてはいないでしょう。

※ 我が国で便所をさす古くからのことばとして広く分布する。『古語大辞典』（小学館、1989年）では「川の上に架け渡して作った屋の意」とある。また「側屋Ⅱ家のそばに設置した家」という説もある。母屋（おもや）に近接したカワ（側）のヤ（屋）ということである。諸橋轍次著「廣漢和辞典」の廁には第二の訓として「ふたごや」とあり、さらに字解には「家の片隅にそえて作ったかわやのこ

と」と説明されている。「今昔物語集」巻第二第廿五に、廁の文字が既出することから、古くから使用されていることがわかる。

平安時代のトイレについては、貴族たちは、みごとな庭のある広大な屋敷で優雅に生活していたが、広い敷地にはトイレはなく、もっぱら携帯用の便器が活躍していたといわれています。これらの便器を、清管（しのはこ）や虎子（おおつぼ）と呼んでいたようで、御簾から御簾へと持ち運んだのです。これに紙が使われたかどうかは分かりません。へらがあつたと聞いていますが、みなさんの研究にお任せします。南海の島の方では、木と木の間に繩をはつてその上をまたいで歩いたと昔民俗学で勉強しました。ベルサイユ宮殿にはトイレがないともいいます。これも平安貴族のトイレと同じです。

香が焚きしめられていた。香水が発達した。それらの背景にこうした事情があるのかもしれない。

ともあれ、紙は貴重であった。その紙をふんだんに使った物語を書いた。それが評判を呼んで、次から次へと書き写されていった。そうしたものが現在伝えられているのです。

源氏物語、枕草子、みんな同じ時代の生活を背景にしています。